

吃音者の相互行為

—吃音に対処するための工夫に注目して—

澤井雪乃(筑波大学大学院生)

1. はじめに

吃音はことばの流暢性の障害である。吃音の主な症状は、①音や音節の繰り返し、②音の引き伸ばし、③話している最中に生じる呼吸や声のブロックである(Guitar, 2006)。以下に発話例を示す。

[発話例]

01 T: そう hhhhhh(.) そうですね hh それ僕も昨日からずっとおもって、あれって-

02 (0.4)

03 T: ぼ: : : : : ↑ 僕らの<中間発表>のはなくしてんのか、

03 行目で吃音者Tは「僕」の語頭音「ぼ」を引き伸ばしている。これは吃音症状の②音の引き伸ばしにあたる。思春期以降になると、吃音者は①繰り返し、②引き伸ばし、③ブロックの症状が目立たないように工夫を試みる(Guitar, 2006)。例えば、発話場面を避ける、特定の語を避ける、別の言葉に言い換える、「ええと」「あー」など挿入語を使用するなどの行動が報告されている(e.g., Lowe, et al., 2017; Vanryckeghem, et al., 2004)。このように吃音に対処する行為は、「二次的行動(Secondary behavior)」(Guitar, 2006)と言われ、早ければ6~13歳ごろに自然と習得する(Guitar, 2006)。なお、二次的行動には、フィルターのように比較的観察可能な行為から、発話場面を避ける、特定の語を避けるといった本人の報告によってしか特定できない行為もある。本研究では観察および報告可能で、かつ発話に関連する二次的行動に注目する。

これまで吃音者が発話を工夫する理由として、多くの研究者がどもることへの恐怖心や羞恥心を挙げてきた(e.g., Corcoran & Stewart, 1998; Crichton-Smith & Isobel, 2002; Guitar, 2006)。例えばGuitar(2006)は、自分の吃音に対して聞き手がイライラしている、不満に思っているなどの否定的な思い込みを挙げている。このような心理学的な研究が盛んな一方で、近年吃音者の相互行為を分析する重要性も指摘されている(e.g., Acton, 2004; Hayhow & Stewart, 2006; Starkweather, 1999)。例えばActon(2004)は、工夫の働きや生起理由を説明するには、電話会話や対面会話などの相互行為場面の分析が有効であることを指摘する。しかし、筆者が知る限りでは工夫の働きや生起理由について相互行為の視点から実証的に示した研究は見られない。そこで本研究は、吃音者が用いる発話を工夫する行為を精密に分析し、相互行為においてどのように用いられているかを明らかにする。

2. データ・分析方法

吃音者5名と非吃音者2名に会話の録音を依頼した。会話を録音する前に7名に対して紙面上で研究の目的を説明し、同意を得た。本研究で用いるデータは、計3組の電話会話である(合計約60分)。会話は吃音者によって録音されたもので、各組には吃音者が一人以上含まれている。なお、吃音症状および吃音に対処する工夫を同定するために、国内で広く用いられている吃音検査法(小澤ほか, 2013)を参照した。分析手法は会話分析を用いた。

3. 分析

具体的な分析に入る前に、さきにデータから分かったことを述べておきたい。分析を進めるなかで以下のような位置で吃音症状およびフィルター系の発話が繰り返し観察された。

[作例] ((吃音症状を太文字でフィラーを網掛けで示す。))

私は、だ- ええと 大学生です

作例のように、ターン構成単位(TCU)の途中で吃音症状が生じ、その直後に「ええと」や「あの一」などのフィラー系の発話が生じる。筆者は吃音検査法を参照し、吃音症状の直後にフィラー系の発話を差しさむ行為を吃音に対処するための工夫と判断した。この位置で見られる吃音症状およびフィラー系の発話を詳細に分析した結果、次の三点が明らかになった。一点目に吃音者は、吃音症状によって語の産出が困難になった場合、それ以上吃音症状が長引かないように語の産出を一旦中断する。二点目に、発話を中断した直後にフィラーを用いることで、吃音によるトラブルを言葉探しのトラブルとして受け手に表明する。三点目に、このように吃音のトラブルを言葉探しの活動に組み込むことで、吃音によって中断した語を再度産出する機会を確保していた。では断片(1)を見てみよう。

(1) [服のセンス] ((吃音者Aと非吃音者Bの電話会話である。二人は共通の友人Cの服装がいつもおしゃれであることについて話している。Bはこの会話の直前に、実はCの服のほとんどがもらい物であることをAに伝えた))

01→A: もらいものにも、hhhhh しても[::, mg-mg-mg-(0.4) >なんだろうく、

02 B: [うん

03 (0.5)

04 B: う[ん

05 A: [くもらう服の]:センスが¥いいっていうのかな。¥

01 行目でAは「もらいものにも」の後に「mg-mg-mg-」と言い淀んだ後、0.4秒の間合いを空けて「なんだろう」を産出する。筆者は、この「mg-mg-mg-」+間合い(0.4秒)について吃音検査法を参照し、「ブロック」の吃音症状と判断した。そして03行目でAは0.5秒の間合いを産出し、04行目でBは「うん」と相槌を打つ。そしてAは05行目で「もらう服のセンスが¥いいっていうのかな」と発話を産出し終える。まず、「mg-」の音と05行目の「もらう」に注目して頂きたい。まず「mg-mg-mg-」は「もらいものにも」に続いていることから、「mg」はある単語の語頭を発していると考えられる。事実、吃音が生じる位置の90%が単語の語頭であることが報告されている(e.g., 菊池ら, 2013; Weiner, 1984)。さらに、筆者が確認したところ「mg」は「もらう」の語頭「も」の準備音として聞き取れる。これらを考慮すると、01行目の「mg-mg-mg-」は「もらう」の産出を試みていると言えよう。したがって、01行目でAは吃音が顕現しないように、発話を中断して目標語の産出を延期したことが分かる。続いて、Aが発話を中断した直後に発した「なんだろう」に注目してほしい。Hayashi(2003)によると「なんだろう」は言葉探しに従事していることを示す自問型の形式であり、次の発話の産出にトラブルがあることを表明する。さらにAの「>なんだろうく、」は速いスピードで、なおかつ末尾の音が落ちないように産出されている。したがってこの「なんだろう」は受け手Bに協力や助けを求めている言葉探しとして認識可能である。このように言い淀みを、助け船を求めない言葉探しとして標示することで、02行目以降ではAの発話を待つことが公然となる。実際に、Bは04行目で「うん」と受け手としてふるまっていることから、Aの言葉探しを待つことに志向したといえる。

以上をまとめると、Aは吃音症状が顕現しないように目標語の産出を一旦中止し、即座に「なんだろう」を用いることで、言葉探しの活動に入ることを会話参加者Bに表明した。これによって、Bが受け手としてふるまうことを公然化し、目標語「もらう」をもう一度産出する機会を確保したといえる。続く断片(2)では、「吃音症状+フィラー系の発話」が繰り返し用いられている。

(2) [名前] ((MとKの電話会話であり、M、K共に吃音者である。MがKの子どもの名前の由来を尋ねる場面である。))

01→M: あっあのさ:::(.)あの::[>ええと<sh:::えっと::ん-(.....)((震え))

02 K: [うんうんうん<

03→M: >なんていうか<その::. hhhh えっと::. hhh sh:::その::. hhh ええと::

04 (0.7)

05 M: ° ちょっど°. hhhhh(あれ)° sh-sh-sh-sh° しりたい(.)ことがあってね =

06 K: =うん

07 (0.5)
 08 K : [> うんうんうん <]
 09 M : [あの::: え-ええと:: <名前の::>(3.0)° y-y-y-y-y°
 10 由来って::: [. hhhh ん:: 何なんやろうと思って.

01 行目でMは「あつ」と新たに話題を想起したことを示す。そして「あのさーあの一ええと」を挟んで、具体的な内容に入ろうとする。しかし冒頭で「sh:::~:::~:::」と引き伸ばしの症状が生じる。その直後に「えっとー」とフィラーを産出する。このような吃音症状+フィラーの組み合わせが、01行目と03行目においてさらに2回生じる。2回目は「吃音症状+なんていうかその一ええとー」であり、3回目は「吃音症状+その一ええとー」であった。最終的に05行目で「sh-sh-sh-sh-」とブロックの症状を伴いながら「しりたい、ことがあってね」と発話を産出し終える。断片(1)と同じく、01行目と03行目に生じる吃音症状「sh」と05行目の「しりたい」に注目してほしい。筆者が確認したところ、「sh」の音は明らかに「しりたい」の語頭「し」の準備音として聞き取れた。したがって、Mは当初「しりたい」を産出する予定であったが、「し」の音で吃音が生じたため産出を一度中断したといえる。続いて、吃音症状の直後に生じる一連のフィラーに注目してみよう。Hayashi (2003 ; 113)によると日本語における言葉探しは、通常音の引き伸ばしや中止などによって開始され、その際「あの」、「なんか」そして「なんだ(った)っけ」などの形式と共起することが多い。この断片で見られるフィラーも「sh:::~:::~:::」という引き伸ばし、そして発話の中止の後に続いている。したがって、言葉探しに従事することを表明するフィラーであるといえる。以上のことから、断片(2)においても吃音症状が長引かないように吃音が伴う発話の産出を一旦中止し、フィラーを用いて言葉探しの活動に入ることを受け手Kに表明していた。最後に断片(3)を見てみよう。断片(3)は、言葉探しの活動を効果的に利用する例である。

(3) [Golden Week] ((吃音者Yと非吃音者Hの会話である。YとHはゴールデンウィーク中に会う約束をしており、この会話では日時を相談している。01行目の直前にYの方から日程を提案した))

01 H : うん(.)全然いい [よ::.
 02 Y : [> なんか×ゴールデンウィーク中:::, (0.7) けっこう:,
 03 ° a-a-a-a-a° あ° a-a-a-a-a° ((力み)) あの:::~:::~::: > 天気が悪い::: <みたいで。
 04 (1.0)
 05 H : あ:あ:あ:::,
 06 (0.8)
 07 Y : 前半はずっと:::, (.) > なんか×(.)曇りとか,
 08 (0.6)
 09 H : うん=
 10 Y : =あめとか?(語頭の力み)
 11 (0.5)
 12 H : う:::ん↓=
 13 Y : =降ってる:::,

01行目でHは「うん、全然良いよ」とYが提案した日程を承諾する。そしてYは02行目からその日を選んだ理由を説明する。02行目でYは「なんかゴールデンウィーク中、けっこう」と言い、直後に「a-a-a-a-a° あ° a-a-a-a-a°」とブロックの症状が出る。その直後に言葉探しを標示するフィラー「あの一」を産出し、「天気が悪いみたいで」とそもそも休暇中は天気が悪いことを説明する。Hはそれに対して「あーあーあー」とYの説明を受け止める。さらにYは07行目から所々間合いを挟みながら「前半はずっとーなんか曇りとかあめとか? 降ってる」と03行目の発話に対して詳細な説明を加える。実際に、Yが提示した日程はゴールデンウィーク休暇の後半であることから、Yは休暇前半の悪天候を考慮したのだろう。

ここで03行目の吃音症状「a-a-a-a-a° あ° a-a-a-a-a°」に注目してほしい。これは02行目の「けっこう」に続く発話であることから、ある単語の語頭を産出する際に生じた吃音症状として認識可能である。同様に10行目「あめ」の「あ」も語頭で発生した吃音症状であり、不自然な力みを伴って発音されている。これらを考慮すると、遡及的ではあるが03行目の吃音症状「a-a-a-a-a° あ° a-a-a-a-a°」は「あめ」の語頭「あ」の産出を試みていると言える。したがって、03

行目でYは、吃音症状「a-a-a-a° あ° a-a-a-a」が長く続かないように「雨」の発話を中断していると解釈できる。続いて「あのー」の直後に産出される「天気が悪いみたいで」(03行目)という発話を見てみよう。この「天気が悪い」という表現は、言い方は異なっているが「曇りとか」(07行目)および「雨とか?」(10行目)と同じ意味内容を持つことに注目してほしい。つまり断片(1)(2)とは異なり、Yは中断した語「雨」の産出を試みず代わりとなる表現を産出した。そして「天気が悪い」と想像の余地を残すことで、10行目で「雨」を産出する機会を確保できた。実際に、受け手であるHも04行目で1.0秒の間合いが空いてようやく「あーあーあー」とYの説明を受け止めている。したがって、「天気が悪い」という説明に対して理解の問題があったことが伺える。以上をまとめると、Yは言葉探しの活動を利用して、中断した語に代わる表現を産出していた。そしてその表現をさらに詳細に説明する過程で、中断した語を産出することに成功した。

4. おわりに

以上、吃音症状が生じた直後にフィラー系の発話を差しはさむ行為を分析した。データ分析の結果、吃音者は吃音症状によって語の産出が困難になった場合、それ以上症状が顕現しないように語の産出を一時中断していることが分かった。さらに、フィラーを用いることでその非流暢性を言葉探しのトラブルとして受け手に表明していた。このように吃音による非流暢を言葉探しの活動に組み込むことで、吃音者は中断した語を再度産出する機会を確保していた。本研究から吃音者は、非吃音者でも用いる言葉探しという何気ない活動を巧みに利用し、吃音のトラブルに対処していることが分かった。

これまで発話を中断してやり直す行為や、フィラーを挿入する行為は、どもることへの恐怖心や羞恥心の表れと見なされてきた。本研究から、それらの行為を相互行為の視点から説明することが可能であることが示唆された。今後は事例数を増やしてさらに分析を進めていきたい。

5. 参考文献

- Acton, Ciaran (2004). A conversation analytic perspective on stammering: Some reflections and observations. *Stammering Research*, 1(3), 249-270.
- Corcoran, Joseph A., & Stewart, Moira (1998). Stories of stuttering: A qualitative analysis of interview narratives. *Journal of Fluency Disorders*, 23, 247-264.
- Crichton-Smith, Isobel (2002). Communicating in the real world: accounts from people who stammer. *Journal of Fluency Disorders*, 27(4), 333-352.
- Guitar, Barry (2006). *Stuttering: An integrated approach to its nature and treatment*. 3rd ed. Philadelphia: Lippincott, Williams & Wilkins.
- Hayashi, Makoto (2003). Language and the body as resources for collaborative action: A study of word searches in Japanese conversation. *Research on Language and Social Interaction*, 36(2), 109-141.
- Hayhow, Rosemarie, & Stewart, Trudy (2006). Introduction to qualitative research and its application to stuttering. *International Journal of Language & Communication Disorders*, 41(5), 475-493.
- 菊池良和・梅崎俊郎・安達一雄・小宗静男 (2013). 吃音症のブロック発生時の声帯運動 喉頭, 25(2), 79-82.
- Lowe, Robyn, Helgadottir, Fjola, Menzies, Ross, Heard, Rob, O'Brian, Sue, Packman, Ann, & Onslow, Mark (2017). Safety behaviors and stuttering. *Journal of speech, language, and hearing research*, 60(5), 1246-1253.
- 小澤恵美・原由紀・鈴木夏枝・森山晴之・大橋由紀江・餅田亜希子・坂田善政・酒井奈緒美 (2013). 吃音検査法(解説) 学苑社
- Starkweather, Woody C. (1999). The effectiveness of stuttering therapy: An issue for science. In Bernstein, Ratner N., & Healey, Charles E (Eds.), *Stuttering research and practice: Bridging the gap*, pp. 231-244, UK: East Sussex, Psychology Press.
- Vanryckeghem, Martine, Bruttana, Gene J., Uddin, Nizam, & Borsel John Van. (2004) A comparative investigation of the speech-associated coping responses reported by adults who do and do not stutter. *Journal of Fluency Disorders*, 29(3), 237-250.
- Weiner, Adeline (1984). Stuttering and syllable stress. *Journal of Fluency Disorders*, 9(4), 301-305.